現代青年の友人関係における主観的ウェルビーイング

——共感性、怒りの特性および表出傾向との関連——

鈴木 有美

問題と目的


ただし、現代青年に関しては、対人関係の希薄化により友人関係のある方が変化したとの指摘がある。例えば、相手に働きかけないことがあるが普通の接し方であった松井 (1990) は、内面的な関わりを避ける傾向がみられる（岡田, 1995）。さらに、小塩 (1998) は、表面的な友人関係を営んでいる
現代青年の友人関係における主観的ウェルビーイング

者が内面的な友人関係を営んでいる者より自己愛傾向が高いことを指している。DSM-IV（APA, 1994）において自己愛は、「空想または行動における誇大性、賞賛されたいという欲求、共感の欠如の広範な様式」とされており、共感の欠如が自己愛に関する障害の診断基準のひとつとなっている。青年期特有の人格的特徴としての自己愛傾向は、病理として扱われる自己愛に関する障害とは異なるものの、同様のタイプ分けが可能であるとの知見が提出されており（小塚, 2002; 清水・海塚, 2002）、一般的な青年期心理としての自己愛傾向の高さも共感性の欠如と関連し、延いては表面的な友人関係を営んでいる者ほど共感性が低い可能性があると考えられる。

木野・鈴木・鈴木（2000）は、他者の感情を理解し、適宜調整できるとは、適応的で適応的な社会生活を営むために要求される能力であり、精神的健康を維持するためにも重要であるとの観点から、女子青年における友人関係に注目し、共感性や友人関係に対する態度、友人関係における満足感といった要因が、友人の不快感情調整にどのように関わるかを検討している。その結果、共感性の高い者は無条件に友人の不快感情を調整しようとする。逆に、友人同士でも個別の領域に立ち入るべきではないという態度を有する者ほど友人の不快感情調整に踏み出す傾向が見出された。

また、自己の感情に関しても、感情経験は特に閲覧をすることの精神的健康に影響を与えるという観点に立つ研究者が増えている（Pennebaker, 1995参照）。社会的適応の観点から考えれば、時には対人関係における感情の調整、特に不快感情の調整が必要となる（Salovey & Mayer, 1990）。崔・新井（1998）は、円満な人間関係を築き脆弱に精神的健康を維持するためには、不快感情表出の制御が重要となるが、現代青年の形式的な友人関係では、制御しきれて満足感や充実感が得られないのであれば仮定し、不快感情表出の制御を測定する尺度を作成し、友人関係満足感との関連を検討している。その結果、友人から言語による被害を受けた場合で生じた怒りを抑制することが、友人関係満足感にとって望ましくないことを示している。

これのことから、友人関係が重要性を増す青年期において、主観的ウェルビーイング、特に友人関係における満足感や感情経験は、共感性と関連する形と予想される。また、自己や他者の感情に注意を向け、特に不快感情については適宜調整できることは、主観的ウェルビーイングや共感性と深く関わるところが予想される。しかも表面的な友人関係が現代青年期の特徴であるとするならば、必ずしも主観的ウェルビーイングと共感性が一定の関連を示すとは限らない。さらに、共感性の低さから、自己の不快感情を調整せずに他者にぶつけたり、他者の不快感情について気にとめなくても、高い主観的ウェルビーイングを有する可能性もある。

さらに、主観的ウェルビーイングも共感性も、気質や感情性の影響を受ける（Davis, 1994; Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999参照）との指摘も考慮せねばならないだろう。例えば、特性的な怒りは、社会的・身体的・心理的ウェルビーイング（Mahon, Yarcheski, & Yarcheski, 2000）や生活満足度（Hong & Giannakopoulos, 1994）に与える影響が大きいことが明らかとなっている。主観的ウェルビーイングが不快感情経験の少なさを含む概念であることや、上述の崔・新井（1998）の研究において示唆された、怒りの抑制が友人関係満足感に与える影響も考慮されると、主観的ウェルビーイングの高さや友人の不快感情調整における重要な役割は認知されるべきである。

したがって、本研究では、友人関係における主観的ウェルビーイングに注目し、共感性および怒りの表現傾向との関連を明らかにすることを目的とする。その際、特性的な怒りがこれらの関連に及ぼす影響を考慮する。さらに、主観的ウェルビーイングの高さや怒りの表現傾向の違いによって、共感性が異なるかどうかについても検討を行うこととする。

方 法

被調査者および手続き

四年制大学在籍する学生288名に対して質問紙調査を実施した。内訳は、男性137名、女性151名（平均19.83歳、標準偏差1.33歳）であった。調査は、各自が自宅へ持ち帰って回答し、1週間後に提出するという形式がとられた。

測 度

(1) 友人関係における主観的ウェルビーイング： 認知的側面は、鈴木（2002）の生活満足度尺度の下位尺度である友人関係満足度尺度（特定の重要な領域における満足のうち、友人関係領域に関するもの）6項目を用いて、「1：全くあてはまらないから」「5：とてもよくあてはまる」までの5段階で評価を求めた。情緒的側面は、鈴木の感情経験尺度（快・不快感情各5項目、計10項目）を用いて、友人関係においてそれぞれの項目に対する感情を示す尺度を「1：全く感じなかったから」「5：とても感じた」までの5段階で評価を求めた。

(2) 共感性： 鈴木（2002）の多元共感性尺度より、認知的側面の下位尺度である観点取得尺度（他者の心理状態をその者の視点に立って理解しようとする傾向）5
項目）と、経済的侧面の下位尺度である他者指向の情緒反応尺度（他者の心理状態に対する経済反応傾向のうち、
他者に焦点を当てられたものを、5項目）を用いて、「1：
全く当てはまらない」から「5：とてもよく当てはまる」ま
での5段階で評定を求めた。
（3）怒りの特性と怒りの出表傾向：鈴木春木
（1994）の邦訳による状態－特性怒り出表目録（State-
Trait Anger Expression Inventory：STAXI；
Spielberger, 1988）より、特性怒り尺度（バーソナリ
ティ特性としての怒りやすさ、10項目）と怒り出表尺度
（怒りの出表：怒りを他者や物など外部へ向ける傾向、
9項目、怒りの抑圧：怒りを内にたてる傾向、8項目、
怒りの抑制：怒りを静まる変動を抑制する傾向、7
項目、計24項目）を用いて、自己の4件法ではなく、特
性怒りの出表に関して「1：全く当てはまらない」から
「5：とてもよく当てはまる」まで、怒りの出表につい
ては「1：全くしない」から「5：とてもよくする」ま
での5段階で評定を求めた。

結果
まず、各尺度で想定されている下位概念に含まれる項
目によって、各下位尺度の合成得点を算出した。ただし、
共感性についてはα係数を検討した結果、「相手を批判
するとき、相手の立場を考えることができない」とい
う視点取るの逆転項目と、「悩んでいる友達がいても、
その悩みを分から合うことができない」という他者指向
の経済反応の逆転項目を除いて算出した。各下位尺度得
点の平均値、標準偏差、およびα係数については、
Table 1 に掲載した。なお、下位尺度得点は、合成得
点を構成する項目数で除算して算出したものである。尖
度、正度、およびα係数の結果から、ここで算出した
下位尺度得点を今後の分析に用いることにした。
第一に、主観的ウェルビーイングと共感性および怒り
の出表傾向との関連を検討するために、相関分析を実施
した（Table 1参照）。その際、特念的な怒りがそれら
の関連に与える影響を考慮し、0次相関係数と怒り特性
を統制した偏相関係数を併せて算出した。その結果、主
観的ウェルビーイングの下位概念については、友人関係
満足感と友人関係における快感情経験との間に高い正の
相関（r = .634, p < .001）が、また、不快感情経験と
の間に中程度の負の相関（r = -.296, p < .001）が
みられた。快感情経験と不快感情経験との間に無相
関（r = -.089, ns）であり、下位尺度間の独立性が確認
された。
主観的ウェルビーイングと共感性との関連については、
友人関係満足感と友人関係における快感情経験は、視点
取得とも共感的な情緒反応ともr = .286～.453 (p <
.001) の関連を示したが、不快感情経験はいずれもも無
相関（r = -.035 & .021, ns）であった。主観的ウェル
ビーイングと怒りの出表傾向との関連については、怒
りの出表および制御傾向との関連はみられず、怒りの抑
制傾向のみ友人関係満足感と快感情経験との間に負の相
関（順に，r = -.308, p < .001; r = -.201, p = .001）
が、不快感情経験との間に正の相関（r = .283, p <
.001）がみられた。
特性的な怒りを統制した偏相関係数との比較では、あ
まり大きな変化は認められないものの、統制していない
ときにはみられなかった友人関係における不快感情経験
と怒りの制御傾向との有意な正の相関（r = .101, ns→
r = .189, p = .002）がみられ、逆に、怒りの出表傾向と
の間にみられた相関（r = .146, p = .017 → r = .022,
ns）はみられなくなった。
第二に、主観的ウェルビーイングと怒りの出表傾向の違いによっ
て、共感性が異なるかどうかを検討するために、友人関
係満足感と怒りの出表傾向の下位尺度得点の中央値を
算出し、その値を基にそれぞれの高群と低群を設定した。

Table 1. 主観的ウェルビーイング、共感性、怒りの特性および出表傾向との関連（0次相関、特性怒りを統制した偏相関）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>満足度</th>
<th>情感</th>
<th>不快感情</th>
<th>共感取得</th>
<th>共感反応</th>
<th>出表</th>
<th>抑制</th>
<th>制御</th>
<th>M</th>
<th>SD</th>
<th>α</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>友人関係満足度</td>
<td>.634**</td>
<td>.286**</td>
<td>.290**</td>
<td>.344**</td>
<td>.452**</td>
<td>.197**</td>
<td>.305**</td>
<td>.075</td>
<td>3.91</td>
<td>.65</td>
<td>.80</td>
</tr>
<tr>
<td>快感情経験</td>
<td>.356**</td>
<td>.286**</td>
<td>.021</td>
<td>.491**</td>
<td>.064</td>
<td>.344**</td>
<td>.018</td>
<td>.344**</td>
<td>3.59</td>
<td>.66</td>
<td>.70</td>
</tr>
<tr>
<td>不快感情経験</td>
<td>.453**</td>
<td>.425**</td>
<td>.035</td>
<td>.491**</td>
<td>.065</td>
<td>.285**</td>
<td>.038</td>
<td>.82</td>
<td>3.85</td>
<td>.71</td>
<td>.77</td>
</tr>
<tr>
<td>視点取得</td>
<td>.009</td>
<td>.054</td>
<td>.146**</td>
<td>-.057</td>
<td>.025</td>
<td>-.256**</td>
<td>-.301**</td>
<td>2.60</td>
<td>.66</td>
<td>.77</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>抑制</td>
<td>-.308*</td>
<td>-.301*</td>
<td>.283**</td>
<td>.011</td>
<td>-.286**</td>
<td>-.172*</td>
<td>.559</td>
<td>3.03</td>
<td>.62</td>
<td>.73</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>制御</td>
<td>-.029</td>
<td>.050</td>
<td>.101</td>
<td>.376**</td>
<td>-.022</td>
<td>.440**</td>
<td>.509</td>
<td>3.19</td>
<td>.71</td>
<td>.83</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>特性怒り</td>
<td>-.116*</td>
<td>-.041*</td>
<td>.206**</td>
<td>-.167*</td>
<td>-.040</td>
<td>.631**</td>
<td>.042</td>
<td>-.352**</td>
<td>2.68</td>
<td>.86</td>
<td>.84</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*p<.001  **p<.01  *p<.05  'p<.10
現代青年の友人関係における主観的ウェルビーイング

<table>
<thead>
<tr>
<th>友人関係満足感</th>
<th>怒りの表出</th>
<th>満足感×表出</th>
<th>怒りの抑制</th>
<th>満足感×抑制</th>
<th>怒りの制御</th>
<th>満足感×制御</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>＜共感性＞</td>
<td>$F$値：$df=1,109$</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>視点取得</td>
<td>8.725*</td>
<td>0.000</td>
<td>0.447</td>
<td>0.767</td>
<td>0.012</td>
<td>10.169*</td>
</tr>
<tr>
<td>共感反応</td>
<td>7.825*</td>
<td>0.346</td>
<td>0.011</td>
<td>2.750</td>
<td>0.030</td>
<td>0.154</td>
</tr>
<tr>
<td>$F$値：$df=1,128$</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>視点取得</td>
<td>14.811*</td>
<td>0.110</td>
<td>0.139</td>
<td>0.090</td>
<td>4.577*</td>
<td>12.017*</td>
</tr>
<tr>
<td>共感反応</td>
<td>24.691*</td>
<td>0.928</td>
<td>5.097*</td>
<td>2.317</td>
<td>0.407</td>
<td>2.194</td>
</tr>
</tbody>
</table>

それを見に、共感性の各下位尺度得点に対して友人関係満足感(2)×怒りの表出傾向(2)×共通性(2)の多変量分散分析を行なったところ、性の主効果が共感性の感情反応[$F(1,237) = 16.154$, $p<.01$]で得られ、性とその他の要因との交互作用効果が有意ではなかったことから、男女別に分けて友人関係満足感(2)×怒りの表出傾向(2)の2要因分散分析結果を報告する（Table 2参照）。


女子学生に関しては、怒りと同様に怒りの抑制傾向の主効果が、視点取得[$F(1,128) = 12.017$, $p = .001$]で得られ、こちらも怒りの抑制傾向の高い者ほど視点取得能力が高かった。他方、男子学生にはみられなかった交互作用効果に関しては、視点取得について友人関係満足感と怒りの抑制傾向の交互作用[$F(1,128) = 4.577$, $p = .034$]に、共感的な感情反応について友人関係満足感と怒りの表出傾向の交互作用[$F(1,128) = 5.097$, $p = .026$]に、それぞれ有意差が認められた。

友人関係満足感低群では、怒りを抑制する傾向の高い者は視点取得[$F(1,54) = 9.137$, $p = .004$]が高かったが、友人関係満足感高群では、怒りの抑制傾向の差による違いはみられなかった。また、友人関係満足感高群では、怒りを表出する傾向の低い者は共感性の感情反応[$F(1,85) = 5.294$, $p = .024$]が高かったが、友人関係満足感低群では、怒りの表出傾向の差による違いはみられなかった。

考 察

本研究は、友人関係における主観的ウェルビーイングに注目し、共感性および怒りの表出傾向との関連を明らかにすると共に、特性的な怒りがこれらの関連に及ぼす影響を検討することを目的として行なわれた。さらに、主観的ウェルビーイングの高さや怒りの表出傾向の違いが共感性に与える影響についても検討された。

主観的ウェルビーイングと共感性との関連については、友人関係満足感と友人関係における快感情経験は、視点取得とも共感的な感情反応とも正の相関関係を示した。これは、社会的適応の観点から精神的健康の検討を進めることの有益性を支持する結果といえよう。主観的ウェルビーイングと怒りの表出傾向との関連については、怒りの抑制傾向と友人関係満足感の間に負の相関関係がみられ、友人関係においてより不快感情を経験していることが示された。これは、友人関係において怒りを経験することがあっても、それを我慢して内にたためると精神的健康の維持によくないことを示唆しており、崔・新井（1998）の結果と一致する。

特性的な怒りがこれらの関連に及ぼす影響に関しては、特性的な怒りを統制した際の相関係数を算出して比較した。その結果、あまり大きな変化は認められなかったものの、統制していないときにはみられなかった友人関係において不快感情経験と怒りの抑制傾向との有意な正の相関がみられ、逆に、怒りの表出傾向との間にみられた関連はみられなかった。これは、「元来怒りっぽい性格である」という要因を除けば、人は友人関係において抱いた不快感情を、何か静かめたり表に出さないようにするものであり、また、不快な感情を多く経験するほど、周囲に対してもそれをぶつけられることなどを示唆する。快感情経験に比べて不快感情経験と友人関係満足感との関連が弱かった今回の結果なども考え合わせると、主観的ウェルビーイングにおける「快感情経験が多い不快感情経験が少ないこと」という感情的側面の概念定義は、いささか単純化したすぎているのかもしれない。

友人関係満足感と怒りの表出傾向の違いが共感性に及ぼす影響に関しては、女子学生においてのみ交互作用効果が得られた。友人関係に満足している者でも、共感性
of progress. Psychological Bulletin, 125, 276-302.


伊藤裕子・相良賀子・池田政子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.

木野和代・鈴木有美・進水敏彦 2000 友人の不快感情調整に関わる要因の検討－女子青年を対象に－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, 47, 59-68.


松井 澄 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫（編著）社会化の心理学ハンドブック 川島書店 (pp. 283-296)


根津由美子・田上不二夫 1995 主観的幸福感に関する展望 カウンセリング研究, 28, 203-211.


小堺真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.

小堺真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み－対人関係と適応、友人によるイメージ評定からみた特徴－ 教育心理学研究, 50, 261-270.


清水健司・海塚敏郎 2002 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.

鈴木有美 2002 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康－共感性およびストレス対処との関連－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 49, 145-155.


鈴木有美・木野和代・岡那智子・遠山孝司・岡口拓彦・伊田勝憲・高谷福子・岡口ゆき・野田勝子 2000 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 47, 269-279.


藤山佳世・園田明人・大野 裕 1995 主観的健康感尺度 (SUBI) 日本語版の作成と、信頼性、妥当性の検討 健康心理学研究, 8, 12-19.


（2004年9月30日 受稿）
ABSTRACT

Adolescents' subjective well-being in their friendships:
Its relationships with empathy and anger

Yumi SUZUKI

A self-report questionnaire was administered to 288 undergraduates to examine the relationship of life satisfaction and recent emotional experience in their friendships, as the indices of positive mental health, with trait empathy, trait anger, and anger expression styles. Results of correlational analyses indicated that both cognitive empathy and affective empathy related positively to their subjective well-being. Anger expression styles, on the other hand, related differently to their subjective well-being; the anger-in expression style negatively related to their subjective well-being; when trait anger was partialed out, correlation between negative affective experience and anger-control expression style increased, while correlation between negative affective experience and anger-out expression style decreased. In addition, findings in a MANOVA revealed among female students that those with low empathy tended to take anger-out expression style but satisfied with their friendships, and that those with high empathy were likely to take anger-in expression style and not satisfied with their friendships.

Key words: subjective well-being, life satisfaction, emotion, empathy, friendship